
おうじさまって降ってくるの？

夜風星鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おっじさまって降ってくるの？

【Nコード】

N3576X

【作者名】

夜風星鈴

【あらすじ】

雲がかかった夜空って、なんか不気味でキライ。

だからって、星が見えたから晴れだなんて油断してもいけない。

星かと思ってたものが落ちてくるし、自称宇宙人の生意気ボーイに会っちゃうし。

生意気ボーイはイケメンだし。

やっぱり曇りの日はいいことないのよ。

目撃者は曇った空

夜だけど、灰色の空。曇っているからだ。

こんな夜はきらい。

だって、すこし怖いんだもん。

幽霊がでたらどうしよう…とか、変な人がいたらどうしよう…とかね。

今、歩いている道も、まったく人通りがないし。

星がきらきら輝いている空は好き。

すつきりするし、怖くないでしょ？

漫画でも小説でも映画でも、きれいな夜空の日に怖いことは起こらないしね？

気持ちを明るくするために、聴いている音楽をロックにしてみる。

うん、いいんじゃない？

音楽を口ずさみながら、リズムにのって足を動かす。

夜空を見上げる。まだ曇っているけど、星が見えた。

「晴れてきたのかな？」

きらきら輝く星。そのほかの星は見えない。

その星だけが見える。

しかも、その星は、だんだん輝きが増しているようで…。

「まぶし…っ！」

ついには大きく見えてきた。

「なに？なんなの？」

今日で地球消滅？なんて考えてたら、みるみる星が近づいてくる。

そして…。

ドンッ！ガシャ！ガラガラ！ピュンピュン…ピーピー…プップ
ップップ…ドガン！バキッ！

「いやあああああ…！」

……。

……あれ？死んで……ない……かも。

目の前には、もとは円盤型だったような気がしなくもない、炎上している機械。

ボコッ。

ぽかんと口が開いていることにも気付かずに見つめていると、中から人っぽいものがでてきた。

ところどころ焦げた深緑の髪に、くりくりした真っ黒な瞳。日本にはいないであろう人。

「ケホケホ……。んっ？あんたって、この惑星の人？」

「……………はっ？」

口を開いた第一声がこれなの？誰なのコイツ？どう考えても私より年下だし。見た感じ、小学校低学年だ。あっ、私は高校二年生なりたての十六歳。ってか、この変な機械なんなの？コイツこの事故ムシしてるの？無視できる状況なの？

「はっ？じゃなくて、おれさまが訊いてんじやん。答えるよ。おまえは、この惑星のやつなのか？」

ム力つくう……まじでム力つく。なんなの、このガキ！おまえですって？！

……ん？あれ？惑星？

「惑星って？どーゆーこと？」

「質問してんのおれさまなんだけど。まあいいや。先に説明してやるよ。」

なんなの、この上から目線！まあ、こういうときこそ、大人の余裕っていうものが大切よね。

「おれさまは、遙か遠く数万光年離れた星の王族だ！そんで、この機械でいろいろ旅してたら、生物がいる星……まあこの惑星を見つけたわけなんだよね。」

……さっぱり意味が分からない。とりあえず先を進めてもらおう。

「それで？」

「それで、見学というか、観光してやろうと思ってさ。」

「これあんたの？この機械で来たの？」

「うん。」

「爆破してるけど？」

下手したら、私死んでたけど？という言葉を飲み込んで訊く。

「そうなんだよ。ちよつとした操作ミスでさ。バランスおかしくなつて、そのままドカンっていつちやっただよね。」

「あやうく私死ぬとこだったんですけど。」

「あつ、そうなの？わりいな。」

あはは、と陽気に笑うこのガキ。もう…。

「で、おまえはこの星のやつ？」

「うん。なに？あんた宇宙人？」

「うちゆうじん…？いや、宇宙人はおまえの方…。ああ、いや、この星からしてみれば、おれさまが宇宙人だな！」

「ふーん…。で、ふざけてないで、あんたは何？！小学生がこんな時間になにしてんの？こんなヘンテコな機械まで持つて！」

“ヘンテコな機械”のところで炎上しているものを足蹴にする…つもりだったが、熱くてやめた。

「おれさまは、ほんとに宇宙人だつて。この機械はUFO。」

「なにが未確認飛行物体なのよ！自分で扱つてたものを“ぼくが使つていた、この燃えているものは、未確認飛行物体です”なんて普通言わないでしょ！」

「おまえつて…意外と頭いいんだな。人は見た目によらないって、あんたのためにあるのか？」

「コラ！くそガキ！」

「ガキ？…おれさまのこと？」

他にどのガキがいるって言うんだ？

「そーよ。年上のお姉さまに向かって、そんなこというなっつーの。」

「おれさま、今年、じゅうななになるんだけど。」

「じゅうなな？…十七つてこと？」

「うん。」

どこに十七歳のチビがいるんだよ？…設定が雑ねえ。

「…うそつくな、くそガキ。」

「嘘じゃねえよ！まあ、この見た目じゃ説得力ねえかもだけど。地面に衝突したときのショックでちっちゃくなっただんだ。あと五分もすれば戻るよ。」

「ふうん。じゃあ見ててあげるわ。」

最近のチビっ子って変わったこと言うのね。ちょっと時間がたてば怒られないとも思ってるのかな？

…ふふ。なんか可愛いかも。

それにしてもすごい子。見た目が、ね。

真っ黒な瞳なんて、ありえないって聞いたことあるけど…。この子の瞳は完璧な漆黒だわ。

髪だって…染めた色じゃない。きらきらして綺麗…。眉毛が深緑だから、地毛の証拠…じゃない？

腕時計を見ると、三分程経っている。

「まだなの？」

「うん…まだみたい…おっ？」

「なに？」

「きたきた！」

顔をあげたら、目の前には青年^{イケメン}。

「……………はい？」

鼻がムズムズすると思ったら、真っ赤な鼻血がタラリ。

「あっ、血でてるよ？だいじょうぶ？」

「ほんとに、さっきのガキ？」

「うん。これがもとの姿。」

「性格までかわってる気がするんだけど…。ほんとに？」

「性格はね、ちっさくなると、精神年齢まで子どもになるんだよね。だからさ、しかたないってことで。」

「反則じゃない？」

「えっ？」

なに？なんなの？まさかホントにちびっこなの？てか、待って。だって、この人ホントにうちゅーじんってことになっちゃうよ？！

「じゃあ…ほんとに宇宙人…？」

「ちよつと待って。おれ、さつき、散々口走っちゃったみたいだ…。今日はもう暗いし、明日説明する。だから、今日はもう帰りなよ。ね？」

頭が混乱していて、考えられない。なんだか勝手に口が動いて、「うん。」なんて言っちゃってた。

「じゃあバイバイ。気をつけてよね？」

足はまともに動かない。時刻はすでに十時をまわってる。人通りのない道。このことが嘘じゃないって見ていたのは、曇っている夜空だけ。

おまけに主人公であるはずの私の名前が一回もでてきてないし。

この意味不明な宇宙人の名前もでてきてないわ。だれなの？この人？

やっぱり灰色の日はいいことがないみたい。

目撃者は曇った空（後書き）

連載小説は初めてです！

二話目がいつになるんだか…わかりません。

ぐちゃぐちゃな文…すみません。

やさしい目で見えていただけたら、と思います。

よろしく願います。

憐れみを覚える

「ああ！もう！なに？」

「そんな怒ることないだろ？名前聞いてるだけじゃんかよ。」

「あ、そうじゃなくて。この番組よ。だれが犯人だと思っ？」

「…おれさまの話聞けよ。犯人はあの黒い男だろ。」

「ふうん。なんだかんだ言っつて、ちゃんと観てたんだ？」

「うるさい。」

土曜日の昼。学校は休み。部屋で二人並んでテレビを見ている。

横にいるのは自称宇宙人のイケメンくん…のガキ姿バージョン。

「で？おまえの名前は？」

「ひかり。野城光やしろひかりよ。」

「ひかり…。覚えてぞ。よし、じゃあ本題に入ろう。」

「あつ、待って！今いいトコなの！」

ブチっとテレビが消された。相当怒っている気がする…。やばい。

ビーム発射なんてしたりしないよね…？

「安心しろ。おれさまは、ビームなんかださないし、だせない。」

「なんで分かった？」

「おまえぐらい馬鹿な奴の思考回路はお見通し。」

「昨日、人は見た目によらないとか言っつてなかった？」

「…気のせい。」

「分かったわよ。じゃあ話に入ろう。まず…。」

「おれさまはフィフィ。」

小さい声で呟いた。

「え？なに？」

イケメンくん（のガキ姿バージョン）が顔を真っ赤に染めながら睨む。

私、そんなまずいこと言っつた？！

「おれさまの名前はフィフィ！言いたくなかったんだよ！笑っただろ

?!」

……恥ずかしい、ってこと？

「いや。別に。おもしろくもないよ？」

「……………」

「コンプレックスってやつ？」

「……………」

なんだよ、かわいいな！

「笑わないよ。フィフィね。覚えた。」

「あんま呼ぶな。」

「はい。」

この宇宙人と出会ったのは昨夜で、明日（今日）話そうって約束したの。

そして、今朝、ピンポンって訪ねて来たの。

「なんで今日はその姿なの？」

「あ？おまえの彼氏とか誤解されたくねーしな。」

「ふん。あんたの都合なわけね、フィフィ。」

「呼ぶなって言ってるんだろ！」

「はい。」

わがまま野郎！どんな教育受けてんだ！

「さて、おれさまが自己紹介してやるから。よく聞けよ！」

わがまま野郎は、立ちあがって胸を張る。

「あ、おまえさあ、心の中でおれさまの呼び名統一してないだろ。

天使のような読者さま達が混乱するぞ。気をつけるよな！」

「うるさい！人の心を読むな！」

なんて奴だ。レディの心を読むなんて。

不躰にも程がある！

「なにがレディだ。おまえはレディじゃねえだろ。」

「うるさい！」

言うと思ったよ！

予想してたわ、馬鹿野郎！

…大人の余裕、大人の余裕。

「おれさまはフィフィ。この国から見れば宇宙人だ。」
フィフィのところまで小声になる。

光は、昨日聞いたわ、という言葉を飲み込む。
怒られるのが目に見えたからだ。

「この…地球？から遠く離れたとこの星から来た。」

「文化が発達した国なんだねえ。」

「ん。そーゆーこと。でも、まだ試作品だ。実験だったんだ。」

「しつもん、しつもんっ！」

手をあげてアピールする光を、フィフィは鬱陶しそうに見る。

「…なんだよ？」

「なんで、あんたが実験に参加したの？科学者？…チビだから違うか。」

これは仮の姿つてことを忘れてんだろうな、とフィフィは思ったが、声には出さなかった。

怒りより、残念な頭がかわいそうに思えたからだ。

「おれさまは科学者なんかじゃない。特別だから乗ったんだ。」

「とくべつ？」

「おれさまは王族なんだ。」

「へえ、王族かあ。そっかあ。すごい…ん？王族？」

理解できてないんだろうな、とフィフィは思ったが、声には出さなかった。

怒りより、残念な頭がかわいそうに見えたからだ。

精神年齢も子どもに戻っているフィフィに、憐れみという感情が芽生えた瞬間だった。

憐れみを覚える（後書き）

遅くなってしまいました。

三話目はいつになるのか…。

もし、こんな作者にコメントを下さる方がいらっしやるならの話で

すが、夜風は弱気なので、辛口コメントは…ちょっと…（笑）

よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3576x/>

おうじさまって降ってくるの？

2011年10月28日15時18分発行